

1909年に竣工した東宮御所、現在の迎賓館赤坂離宮は、明治期を代表する国家的建築としての重要性もさることながら、その内外を彩る装飾の華麗さで知られている。しかし、不明な点も残されており、多くの部屋に設置されている壁画・天井画の作者や制作経緯が必ずしも明らかとなっていないのもその一例である。この宮殿の2階東側に位置する旧喫煙室(現東の間)は、アルハンブラ宮殿を模したムーリッシュ様式の絢爛たる装飾が施され、迎賓空間の一部として華やかな光彩を放つ部屋であるが、その壁面を飾る15面の大画面壁画に関する作者や制作年などの詳細は、長いこと不明とされてきた。また、モチーフとしてエジプトのピラミッドなどが描かれており、それに因んで喫煙室はいつしか「エジプトの間」と呼ばれるようになっていたのだが、この画題選択についても、スペイン・グラナダのアルハンブラ宮殿を規範とする内装との不一致が指摘される一方、エジプト風景が選ばれた理由は詳らかではなかった。本発表では、この壁画に関する調査・研究を通じて明らかになった事実を報告し、作品の意義についての検討を試みた。

まず、この壁画が完成したのは、東宮御所の竣工から5年近くを経た1914年7月のことであった。揮毫者には、当時の美術界で幅広い活躍を見せ、数々の壁画・天井画を手掛けた実績をもつ和田英作(1874-1959)が起用された。1913年9月、壁画制作の委嘱を受けた和田は、東京帝国大学教授・伊東忠太、同・塚本靖、宮内省内匠寮技師・佐野昭、東京美術学校教授・久米桂一郎ら、それぞれ建築、装飾、美術に造詣の深い関係者から参考資料の提供を受け、制作を進めた。当初はアルハンブラ宮殿周辺の風景が画題として想定されたが、実際に描いてみたところ、イタリア辺りとの特徴的差異に乏しかったため、エジプト・カイロ近辺の風景に変更された。この飛躍は一見唐突にも感じられるが、その理由は、喫煙室という部屋の性格、そこから連想される煙草とエジプトとの関係、そして当時のヨーロッパの思想的潮流とイスラム風・エジプト風インテリアの流行からの影響、さらには当時の日本におけるエジプト・ブームとの関係など、数々の観点から理解することが可能である。

19世紀のイギリスやフランスでは、イスラム風やエジプト風の内装をもつ喫煙室がしばしば試みられたが、それはヨーロッパにもたらされる煙草が、多くはイスラム諸国やエジプトから輸入されたことからの連想による。それに加えて、当時のヨーロッパでは、1250年から1517年にかけてエジプト・シリア等を支配したイスラムの мамルーク朝の文化がリヴァイヴァルするという流行があり、建築においてはムーリッシュ様式の採用となって現れた。東宮御所喫煙室へのムーリッシュ様式の導入は、こうした当時のヨーロッパの潮流とも無縁ではなかったはずで、 мамルーク朝の首都であったカイロがグラナダと並ぶイスラムの代表的都市と見做されていたことと考え合わせるなら、壁画の画題としてのエジプト・カイロ風景の選択も、内装様式との齟齬を生じるものではないと言える。

一方、日本では、明治30年代以降、国内の煙草産業が急速に発展し大衆化してゆく中、エリート層の間では香り高い最高級品であったエジプト製紙巻煙草が一種の流行ともステイタス・シンボルともなっていた。また、明治後半には煙草の原料となる国産の葉タバコの輸出が始まり、のちにエジプトにも輸出されるようになっていたことから、当時の日本人にとって、煙草とエジプトとはイメージ的に結びつきやすいものであったと言える。さらに明治後半から大正にかけては、エジプトの美術や文化に対する関心が高まっていたことも、喫煙室壁画の画題選択の背景として指摘できよう。

こうして十字形の喫煙室を取り囲むように配置された15面の壁画には、ナイル河畔に茂る椰子の木々や花樹、帆船フルーカが浮かぶ川辺、砂漠のピラミッドや遺跡、イスラム建築を擁するカイロの旧市街など、当地を代表するモチーフが組み込まれ、あたかも窓外にパノラミックな景観が展開するかのように描かれた。制作にあたって、和田は装飾的効果の追求に力を注ぎ、完成した壁画は特に内装との調和が高く評価され、傑作と称えられた。しかし、その後は人々の目に触れる機会も少ないままに、壁画の制作経緯は忘却されていくことになる。

日本が新たに近代国家としての歩を進めていた時代、それは美術家たちの社会的理想と結びつける形と言うなら、一般の人々の芸術への理解をも含めた文化的な近代精神の揺籃期でもあった。そうした中であって、当時の公共建築物に設置された壁画は、建築家や美術家が人々を取り巻く環境の中に用意した、良き趣味を育む装置としての側面を持っていた。その点に着目するなら、喫煙室壁画は、単に建築に従属する調和的な装飾を超えて、今も制作時の姿のままに、かつての時代精神を物語りつつ、貴重な価値を湛えて存在していることが見えてくる。今後は個々のモチーフについて解析の精度を高め、さらに詳細な研究を目指してゆきたいと考えている。